

青 年

森 鷗外作



現代社会を描きたい希望をもって東京へ出た文学青年小泉純一が、初志に反して伝説に取材した小説を書こうと決意するに至るまでの体験と知的発展を描く。作中に漱石、壺太郎、

白鳥、鷗外自身などをモデルとした作家が登場する。鷗外(1862-1922)の歴史小説を理解する上に必読の作品。明治43—44年作。(解説 = 唐木順三)



緑

5-4

岩波文庫

青 年

1948年10月15日 第1刷 発行
1969年11月17日 第31刷改版発行 ©
1991年3月5日 第52刷 発行

作 者 もり おう がい
 森 鷗 外

発 行 者 安 江 良 介

〒101-02 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 株式 岩 波 書 店
 会社

電話 03-3265-4111(案内)

定価はカバーに表示してあります

印刷・精興社
製本・田中製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN4-00-310054-9

岩 波 文 庫

31-005-4

青 年

森 鷗 外 作



岩 波 書 店

青

年

壺

小泉純一は芝日蔭町の宿屋を出て、東京方眼図を片手に人にうるさく問うて、新橋停留場から上野行きの電車に乗った。目まぐるしい須田町の乗り換えも無事に済んだ。さて本郷三丁目で電車を降りて、追分から高等学校に付いて右に曲がって、根津権現の表坂上にある袖浦館という下宿屋の前に到着したのは、十月二十何日かの午前八時であった。

ここは道が丁字路になっている。権現前から登って来る道が、自分のたどって来た道を鉛直に切るところに袖浦館はある。木材にペンキを塗った、マツチの箱のような擬西洋造りである。入り口の鴨居の上に、木札がたくさん並べてはめてある。それに下宿人の姓名が書いてある。

純一は立ちどまって名前を読んでみた。自分の捜す大石狷太郎という名は上から二三人目に書いてあるので、すぐに見つかった。赤い襷を十文字に掛けて、上がり口の板縁にぞうきんを掛け、いる十五六の女中が、ぞうきんの手を留めて、「どなたの所へいらっしゃるの」と問うた。

「大石さんにお目に掛かりたいのだが。」

田舎から出て来た純一は、小説で読み覚えた東京詞を使うのである。ちようど不慣れな外国語

を使うように、一語一語考えてみて口に出すのである。そしてこの返事の無難にできたのが、心中でうれしかった。

ぞうきんをつかんで突っ立った、ませた、おちゃっぴいな小女こおんなの目に映じたのは、色の白い、卵たまごから孵かえったばかりの雛ひよこのような目をしている青年である。薩摩さつま絣まがすりの衿あわせに小倉こくらの袴はかまをはいて、同じ絣まがすりの袴あわせを着ている。被物かぶりものは柔らかな茶褐ちやかっの帽子で、足には紺足袋こんたびに薩摩下駄さつまげを引っ掛けている。あたりまえの書生しよせいの風俗ではあるが、何から何まで新しい。それでゆうべ始めて新橋に着いた田舎者いなかものとはたれにも見えない。小女こおんなは親しげに純一を見て、こう言った。

「大石さんの所へいらっしたの。あなた今時分いらっしたってだめよ。あのかたは十時にならなくっちゃ起きていらっしやらないのですもの。ですから、いつでも御飯は朝とお午ひるとがいっしょになるの。お帰りが二時になったり、三時になったりして、それからお休みになると、一日寝ていらっしてよ。」

「それじゃあ、少し散歩をしてから、また来るよ。」

「ええ。それがようございます。」

純一は権現前の坂のほうへ向いて歩き出した。二三歩すると袂たもとから方眼図の小さく折ったのを出して、見ながら歩くのである。自分の来た道では、官員らしい、洋服の男や、角帽の学生や、白い二本筋の帽をかぶった高等学校の生徒や、小学校へ出る子供や、女学生なんぞが、ぞろぞろと本郷の通りのほうへ出るのにすれ違ったが、今坂のほうへ曲がって見ると、まるで往来がない。

右は高等学校の外囲い、左は角ができたばかりの会堂で、そのそばの小屋のような家から車夫が声を掛けて車を勧めたところを通り過ぎると、土塀や生垣をめぐらした屋敷ばかりで、その間にきれいな道が、ひろびろと付いている。

広い道を歩くものが自分ひとりになると共に、このごろの朝の空気の、毛髪の根を緊縮させるような淡みを感じた。そして今小女に聞いた大石の日常の生活を思った。国からわざわざいに出て来た大石という男を、純一は頭の中で、おぼろげでない想像図にえがいているが、今聞いた話はこの図の輪郭を少しも傷つけはしない。傷つけないばかりではない、いっそう明確にしたように感ぜられる。大石というものに対する、純一が景仰と畏怖との或る混合の感じが明確になったのである。

坂の上に出た。地図では知れないが、割合に幅の広いこの坂はSの字をぞんざいに書いたように屈曲して付いている。純一は坂の上で足を留めて向こうを見た。

灰色の薄曇りをしている空の下に、同じ灰色に見えて、しかも透きとおった空気に浸されて、向こうの上野の山と自分の立っている向うが岡との間の人家の群れが見える。ここで目に映ずるだけの人家でも、故郷の町ほどの大きさはあるように思われるのである。純一はしばらくながめていて、深い呼吸をした。

坂を降りて左側の鳥居をはいる。花崗石を敷いてある道を根津神社のほうへゆく。下駄の響きのように鳴るのが、いい心持ちである。剝げた木像の据えてある隨身門からうちを、古風な瑞籬で

囲んである。故郷の家で、お祖母様のお部屋に、錦絵の屏風があった。その絵に、どこの神社であつたか知らぬが、こんな瑞垣があつたと思う。社殿の縁には、ねんねこ絆纏の中へ赤ん坊をおぶつて、手ぬぐいの鉢巻をした小娘が腰を掛けて、寒そうにからだをすくめている。純一は拝む気にもなれぬので、小さい門を左のほうへ出ると、溝のような池があつて、向こうの小高いところには常磐木の間に葉の黄ばんだ木のまじった木立ちがある。濁ってきたない池の水の、ところどころに泡の浮いているのを見ると、いやになつたので、急いで裏門を出た。

藪下の狭い道にはいる。多くは格子戸のはまっている小さい家が、一列に並んでいる前に、売り物の荷車が止めてあるので、からだを横にして通る。右側はくずれ掛かつて住まわれなくなつた古長屋に戸が締めてある。九尺二間というのがこれだと思つて通り過ぎる。その隣に冠木門のあるのを見ると、色川国士別邸と不格好な木札に書いて釘づけにしてある。妙な姓名なので、新聞を読むうちに記憶していた、どこかの議員だつたなと思つて通る。それから先はあまりきれいでない別荘らしい家と植木屋のような家とが続いている。左側の丘陵のようなところには、だいぶ大きい木が立っているのを、ひどく乱暴に刈り込んである。手入れの悪い大きい屋敷の裏手だなと思つて通り過ぎる。

爪先上がりの道を、平らになるところまで登ると、また右側が崖になつていて、上野の山までの間の人家の屋根が見える。ふいと左側の籬のある家を見ると、毛利某という門札が目につく。純一は、おや、これが鷗村の家だと思つて、ちよつと立つて駒寄の中をのぞいて見た。

千からびた老人のくせに、みずみずしい青年の中にはいつてまごついている人、そして愚痴といや味とを言っている人、竿と紐尺さおひもじやくとを持って測地師が土地を測るような小説や脚本を書いている人の事だから、今時は苦虫くちゅうをかみつぶしたような顔をして起きて出て、台所で炭薪すすぎの小言こごでも言っているだろうと思って、純一は身ぶるいをして門前を立ち去った。

四辻よつてを右へ坂を降りると右も左も菊細工の小屋である。国の芝居しばいの木戸番のように、高い台の上にあぐらをかいた、人買いきんちやくか巾着切りのような男が、どの小屋の前にもいて、手に手に絵番付のようなものを持っているのを、往來の人に押し付けるようにして、うるさく見物を勧める。まだ朝早いので、通る人が少ないところへ、純一が通り掛かったのだから、道の両側から純一人を的にあてにして勧めるのである。外から見えるようにしてある人形を見ようと思っても、純一は足を留めて見る事ができない。そこで覚え足おぼえあしを早めて通り抜けて、右手の広い町へ曲がった。

時計を出して見れば、まだ八時三十分にはかならない。まだなかなか大石の目のさめる時刻にはならないので、いいかげんな横町よこちょうを、上野の山のほうへ曲がった。狭い町の両側はきたない長屋で、塩せんべいを焼いている店や、小さい荒物屋あらものやがある。物置きにしてある小屋の開き戸が半分あいているために、身を横にして通らねばならないところさえある。勾配こうばいのない溝みぞに、ごみが落ちて水が淀よどんでいる。血色の悪い、やせこけた子供がうろうろしているのを見ると、いたずらをする元氣もないように思われる。純一は国なんぞにはこんな哀れな所はないと思った。

曲がりくねってゆくうちに、小川に掛けた板橋を渡って、田圃たんぼが半分町になり掛かって、掛け

流しのおりのような新しい家のまばらに立っているあたりに出た。一軒の家の横側に、ペンキの大字で楽器製造所と書いてある。なるほど、こんな物のあるのも国と違う所だと、純一は驚いて見て通った。

ふいと墓地の横手を谷中やなかのほうから降りる、田舎道いなかみちのような坂の下に出た。灰色の雲のあるところから、ないところへ日が回って、黄いろい、寂しい暖かみのある光がさつと差して来た。坂を上のぼって上野の一部を見ようか、それではあまりおそくなるかもしれないと、危ぶみながら佇立ちようりつしている。

さっきから坂を降りて来るのが、純一が視野のはずれのほうに映っていた、書生風しやせいふうの男がじきそばまで来たので、覚えず顔を見合わせた。

「小泉じゃあないか。」

先方から声を掛けた。

「瀬戸せとか。出し抜けにあったから、僕はびっくりした。」

「君より僕のほうがよっぽど驚かなくちゃあならないのだ。いつ出て来たい。」

「ゆうべ着いたのだ。やっぱり君は美術学校にいるのかね。」

「うむ。今学校から来たのだ。モデルが病氣だと言って出て来ないから、駒込こまごみの友だちのところへでも行こうと思って出かけたところだ。」

「そんな自由な事ができるのかね。」

「中学とは違ふよ。」

純一は一本参つたと思つた。瀬戸速人とはY市の中学で同級にいたのである。

「どこがどんなところだか、わからないからしかたがない。」

純一はいや味気なしに折れて出た。瀬戸も実は受け持ち教授が展覧会事務所に行っていないのを幸いに、腹が痛いとかなんとか言つて、ごまかして学校を出て来たのだから、今度は自分のほうで気の毒なような心持ちになつた。そして理想主義の看板のような、純一の黒く澄んだひとみで、自分の顔の表情を見られるのが、すこぶる不愉快であつた。

この時十七八の、不斷着で買ひ物にでも行くというような、廂髪のちよつと愛敬のある娘が、袖がさわるように二人のそばを通つて、純一の顔を、氣に入つた心持ちを隠さずに現わしたような見方で見て行つた。瀬戸はその娘の肉つきのいいからだをじつと見て、あわてたように純一の顔に視線を移した。

「君はどこへ行くのだい。」

「路花にあおうと思つて行つたところが、十時でなけりゃあ起きないということだから、このへんをさっきからぶらぶらしている。」

「大石路花か。なんでもひどく無愛想なやつだということだ。やっぱり君は小説家志願でいるのだね。」

「どうなるか知れはしないよ。」

「君は財産家だから、なんでも好きな事をやるがいいさ。紹介でもあるのかい。」

「うむ。君が東京へ出てから中学へ来た田中という先生があるのだ。校友会で心やすくなつて、僕のところへ遊びに来たのだ。その先生が大石の同窓だもんだから、紹介状を書いてもらった。」

「そんならよろう。ずいぶん話のしにくい男だというから、ふいと行つたつてだめだろうと思つたのだ。もうそろそろ十時になるだろう。そこいらまでいっしょに行こう。」

二人はまた狭い横町を抜けて、幅の広い寂しい通りを横切つて、純一の一度渡つた、小川に掛けた生木の橋を渡つて、千駄木下の大通りに出た。菊見に行くらしい車が、だいぶ続いて藍染橋のほうから来る。瀬戸が先へ立つて、ペンキ塗りの杵にいで井病院と仮名違いに書いて立ててある、西側の横町へはいるので、純一は付いてゆく。瀬戸が思い出したように問うた。

「どこにいるのだい。」

「まだ日蔭町の宿屋にいる。」

「それじゃあ居所がきまつたら知らせてくれたまえよ。」

瀬戸は名刺を出して、動坂の下宿の番地を鉛筆で書いて渡した。

「僕はここにいる。君は路花のところへ入門するのかね。盛んな事をやって盛んな事を書いているというじゃないか。」

「君は読まないか。」

「小説はめつたに読まないよ。」

二人は藪下へ出た。瀬戸が立ちどまった。

「僕はここで失敬するが、道はわかるかね。」

「ここはさっき通ったところだ。」

「それじゃあ、いづれそのうち。」

「さようなら。」

瀬戸は団子坂のほうへ、純一は根津権現のほうへ、ここで袂を分かった。

式

二階の八畳である。東に向いている、西洋風のガラス窓二つから、形紙を張った向こう側の壁までいっばいに日が差している。この袖浦館という下宿は、シナ学生なんぞを目当てにして建てたものらしい。この部屋は近ごろまでインド学生が二人住まって、籐の長椅子の上にごろごろしていたのである。その時やすい羅氈の敷いてあった床に、今は畳が敷いてあるが、南の窓の下には記念の長椅子が置いてある。

テエブルの足を切ったような大机が、東側の二つの窓の間ところに、少し壁から離して無造作に据えてある。なぜ窓の前に置かないのだと、友だちがこの部屋の主人に問うたら、窓掛けを引けば日はいらない、引かなければまぶしいと言った。窓掛けの白木綿で主人がぬれ手をふいたのを、女中が見て亭主に告げ口をしたことがある。亭主が苦情を言いに来たところが、もう洗

濯たくしてもいいころだと、あべこべにしかって恐れ入らせたそうだ。この部屋の主人は大石おおいし狷太けんた郎ろうである。

大石は今顔を洗って帰って来て、更紗さらさの座ぶとんの上にあぐらをかいて、小さいやかんの湯げを立てている火鉢ひばちを引き寄せて、敷島しきしまを吹かしている。そこへ女中が膳ぜんを持って来る。その膳の汁椀じゅわんのそばに、名刺が一枚載せてある。大石はちよいと手に取って名前を読んで、黙って女中の顔を見た。女中はこう言った。

「御飯を上がるのだと申しましたら、それでは待っているとおっしゃって、下にいらっしゃいます。」

大石は黙ってうなずいて飯を食い始めた。食いながら座ぶとんのそばにある東京新聞を広げて、一面の小説を読む。これは自分が書いているのである。社に出ているうちに校正は自分で置いて、これだけは毎朝一字残さずに読む。これが非常に早い。それからやはり自分の担当している付録にざっと目を通す。付録は文学欄でうずめていて、記者は四五人のほかに出でない。書くことは、第一流と言われる二三人の作の批評だけであって、その他の事にはほとんど全く容喙ようわいしないことになっている。大石自身はその二三人のうちの一人なのである。飯が済むと、女中は片手に膳、片手に土瓶どびんを持ってたちながら、こう言った。

「お客様をお通し申しませうか。」

「うむ、来てもいい。」

返事はしても、女中のほうを見もしない。ずいぶんそっけなくして、笑談一つ言わないのに、女中は飽くまで丁寧にしている。それは大石がほかの客の倍も付け届けをするからである。窓掛け一件の時亭主が閉口して引っ込んだのも、同じわけで、大石は下宿料をきちんと払う。時々はめんどろから来月分も取って置いてくれいなんぞということさえある。袖浦館の上から下まで、大石の金力に刃向かうものはない。それでいて、着物なんぞはずいぶん質素にしている。今着ている銘撰の綿入れと、締めている白縮緬のへこ帯とは、相応に新しくはあるが、寝る時もこのまま寝て、洋服に着換えない時には、このままでどこへでも出かけるのである。

大石が東京新聞を見てしまって、そばにかさねて置いてある、ほかの新聞二三枚の文学欄だけを拾い読みをするところへ、さっきの名刺の客がはいって来た。二十二三の書生風の男である。縞の綿入れに小倉袴をはいて、羽織は着ていない。名刺には新思潮記者とあったが、実際このごろのまじめな記者には、こういうふうなのが多いのである。

「近藤時雄です。」

鋭い目のくぼんだ、鼻の上がった顔に、無造作な愛敬をたたえて、記者は名のった。

「僕が大石です。」

目をあげて客の顔を見ただけで、新聞は手から置かない。用があるなら、早く言ってしまうて帰れとでも言いそうな心持ちが見える。それでも、近藤の顔に初め見えていた微笑は消えない。主人が新聞を手から置くことを予期しないと見える。そしてあらゆる新聞雑誌に肖像の載せてあ